とおい空

冴凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とおい空

【Ｎコード】
Ｎ２８２９Ｄ

【作者名】
冴凪

【あらすじ】
生きる気力をなくしていた少年の物語。

第一話

俺は何のために生きているのだろうか。
ただ何となく生きて、何となく進学して、何となく結婚して、子供も出来て、そして死んでいくのだろうか・・・
俺をどこかで必要としてくれる人間なんているのだろうか・・・・。

第2章

今、俺はバイクで走っている。
「こらぁ～～待て！！！」
……言い直そう。俺はバイクで逃走している。
理由は……万引き。
俺は、万引きの常習犯だった。
それで生活を立てている。
親は知らないが。

「やったぜ」
俺は仲間にそう一言かけると、部屋に入っていった。
「さすが蓮！」
……こいつはいつもそうだ。
決して自分では手を下さない。
下っ端の俺にやらせるんだ。
‘今に見てろ’と俺はして唇をかむ。

「でもよぉ、お前がこんなことするなんてな。一年前じゃ思いもよらなかったぜ」
弘樹(ひろき)が嬉しそうに言う。
「俺、いつ蓮にチクられるかビクビクだったしな」
俺は、低い声で
「変わったんだよ。俺も。そしてお前もな」

「しかし、お前かわったよな」
陸が言う

「見直したぜ」
これはボスだ。

俺は今、不良グループとつるんでいる。
前までは陰キャと呼ばれるグループに属していた。
それが一年前から変わったのだ。
ある事件に巻き込まれて。
まぁ親はビックリしただろうが、そんな事は関係ない。
『お前はお前の好きな道を生きろ』
そういわれてから、本当に好きな道を行き始めたからな。
この頃、生きる目的がなく生きてるがな。
だから俺はこうして毎日ダラダラと万引きしたりして過ごしている。
世間体を気にする親は、俺をナントカして元の俺に戻そうとするが
俺には全く関係の無い話だった。

「蓮！！！」
家に帰ると親が玄関で待ち構えていた。
俺はその親を振り払い、自分の部屋へいく。
「待ちなさい！一体こんな時間まで何処に行ってたの！！説明しなさい！」
親が叫ぶ。
こんな時間。
今の時刻は６時。
いわえる朝帰りってやつだ。
最近は珍しくない。
「うっせぇんだよ。お前はだまって金くれりゃぁいいんだよ。
お・ば・さ・ん」
俺はそう言うと自室に行った。

俺とあの人とは血が繋がってない。

義理の親だ。
そのことを知ったのは5年前。
親が話してるのを聞いてしまったのだ。
それでも俺は知らない振りをして、親の言いなりになっていた。
あのことがあるまでは――――。

第2章（後書き）

始めまして。
冴凪といいます。
今回『小説家になろう』で、投稿させてもらってます。
まだまだ未熟ですが、よろしくしてやってください。

第3章

ちょうど1年前のこと。
まだ真面目に学校に行ってたときのころの話だ。
その日はたまたま学校が短縮授業で、俺が早く帰っていた。
その事を、親は知らずに友人を家に上げていた。
家に帰ったときは親は居なかったからそのまま部屋に行ったのだ。
「えぇぇ〜」
声の大きさにビックリしてリビングに行った。
それは親の友人だった。
「あんたの子じゃないの?!蓮君?」
「そうなのよね。ホントは捨て子なの。生まれたばかりのころ、玄関に捨ててあってそれで主人が育てようって言い始めたから育ててるんだけどね」
俺の出生の秘密を喋ってるみたいだ。
「その事蓮くんは知ってるの??」
「まだ言ってないのよ。自分の子として戸籍にも入ってるから言わなきゃ気付かないのよね。多分、言わないかな。この年まで隠してきたわけだし。今更言ってもねぇ・・・」
「蓮君いくつだっけ?」
「今年、高校に入ったばっかり。でも、反抗期みたいでろくに口も聞いてないわ。もう、捨てちゃおうなんて考えたこともあるのよ。金はかかるし、子供みたいにかわいくないし」
その言葉を聴いた途端、俺は頭の中が真っ白になって家を飛び出してしまった――――――。

気が付けば、繁華街を歩いていた。

結構な時間にもなっていて、チンピラなどがフラフラしてた。

『ドンッッ』
鈍い音がした。
「おいっっ。何処見てほつきあるいてるんだよっっ。アブネェじゃねぇか！！」
「す・すみません」
「すみませんで済んだら警察はいらねぇんだよ！！金、出しな！」
「俺、今金持ってなくて……」
世間一般的に言うカツアゲだという事が分かった。
「お前、いい度胸してんじゃねぇか」
そういうと、チンピラは俺を復路叩きにし始めた。
俺はされるがままになっていた。

何分経っただろうか……。
俺はクラスで、不良系の弘樹たちに助けられていた。
「大丈夫か??」
俺が目を覚ますと弘樹が心配そうな顔で覗き込んでいた。
「あ、ありがとう。すぐ帰るから心配しないで」
すぐに帰ろうと思ったが傷が酷くてなかなか起き上がれない。それを見た弘樹は
「傷が良くなるまでココに居ろよ。大丈夫。お前を変な事に巻き込まないからさ」
といった。俺は大人しく、ココに居座ることにしたのだった。

第3章（後書き）

蓮が不良に走った過去です。
次も（多分）過去話になります。
読んだら感想など送ってくれると嬉しいですｗｗ

第4章

弘樹は見た目によらずいい奴だった。

「ココは？」

「俺のマンション。誰も来ないから安心しろよ」

「あ、ありがとう」

俺は辺りを見回した。

結構広い。

ココは寝室のようだ。

何でこんなことところ弘樹一人が……？

不思議に思ったが、深入りしてはいけないと思い黙っておく。

「ほれっ。これなら食えるだろ？？」

弘樹が渡してくれたものは、ゼリーだった。

「……もしかして俺の為に……？」

「ついでだよ。食事の買出しのついで。俺も腹へってたし。その傷じゃぁ何も食べれないだろ？？」

「あ、ありがとう」

「あんま喋るなよ。痛いんだろ？」

俺は、素直に従った。

「お前、行くとこないのか？」

しばらくたった頃、弘樹が聞いてきた。

「……」

俺は無言でいた。話したらどうせバカにされるだろうと思ったし、

まだコイツを信用出来なかったからだ。
「話したくないならいいけどさ。
俺の話、きいてくれるか……？」
突然のことで俺はあまり理解できなかった。
そうとは知らない弘樹は喋り始めた。
「俺は、小さいころ親に捨てられたんだ。今まで育ててくれたのは親戚なんだ。でも、その親　戚にも捨てられて俺は行くところがなかった。学校から帰って来たら、何も無かったから　　な。俺がいると迷惑だったらしい。だから俺は非行走った。警察にも何回も世話になった　　し、悪いことも散々してきた。その腐ってた俺を拾ってくれたのが今のボスなんだ。まぁ、　ボスも結構なワルだけどな。でも、根性は腐ってねぇんだよ。俺はそのボスのお蔭で助けられた。初めて俺という人間を理解してくれる人間だからな」
弘樹は、俺より辛い立場にあってたんだ。
「もし、行くところがないならボスのところまで案内するぜ。お前ならきっとボスとうまくいく」
その一言で決めた。
「俺も……そのボスのところに連れてってくれないか」
弘樹は黙って頷いた。

第４章（後書き）

弘樹と蓮の出会いですね。。。
結構、弘樹カッコいいです（笑）
始めは、ダメダメにしようと思ったのですが。。。

この小説を読んでくれた方、ありがとうございます☆
もし、よろしければ評価してくださると嬉しいですw

第5章

翌日、弘樹はボスの所に連れて行ってくれた。
「ココだ。見た目はちょっとおっかないけど、割といい人だ。お前のことは昨日、電話してあるから。まぁ、入って待っとけよ。ボスは、仕事中だと思うし」
弘樹に押されて入ってみる。部屋は弘樹のところより大分大きい。いや、部屋というより事務所みたいだった。
俺が珍しく事務所を見渡していると
「お前か。俺に逢いたいって奴は」
後ろから声がした。
振り返ってみるとそこにはいかにもやのつく職業をしているとしか思えない大男がいた。
「……」
臆病だった俺はその大男をみて何もいえなくなった。

『すぐにかえろう』
長い沈黙の後、俺はそう思った。
『いつものように家に帰ればいい。そのほうがいい』
俺は帰ろうとした。
「まぁ、座れや」
大男はそう促した。俺はすぐには帰れないらしい……

俺は指定されたソファーに腰掛けた。
「で、俺に話があるんだって？」
その声が、大男の中から出している声とは思えない優しい口調で俺に尋ねてきた。
その声に乗せられて俺は少しずつ話していった。
今まで信頼してきた親のこと
その親に裏切られたこと
自分は捨て子だったこと
自分は親にとっていらない存在だったこと
チンピラに絡まれて袋叩きにされたこと
それを助けてくれたのが弘樹だということ
大男はあれの話を真剣にきいてくれて時には相槌を打ってくれた。
「弘樹からきいて思ったんです。『俺はココでやり直せる』だから俺をココにおいてください！！」
大男は少し戸惑ったような顔をしていた。
「置いてやるのは別に構わないんだけど、お前には少し困難な世界だぞ？」
「それでも構いません！！」
「……後悔しても遅いからな」
大男の言ってる意味が理解できるようになるのはもう少し後になってからだった。

第5章（後書き）

しばらく更新が空いてしまいました。。
ＰＣが使えなくて。。

まだまだ過去話続きそうです。
どうかお付き合いください＞＜

第6章

ボスはゆっくりと立ち上がって一つの鍵を出してきた。
「今日からお前の家だ」
その鍵を俺にくれた。
「今日からココがお前の家だ。まぁ受け取れ」
「あ、ありがとうございます・・・」
「その代わりといっちゃぁなんだが、お前には仕事をしてもらう」
「仕事・・・？」
「まぁ、生活費を稼ぐんだな。仕事は何でもいい。家賃は俺に払ってもらう。家賃は2万円だ」
「・・・はぁ・・・」
急な展開に俺はただ唖然とするばかりだった。
「それともう一つ。週に一回は家に帰ること」
「どうしてですか？！俺はあの家に捨てられたんですよ！？今更かえれません」
「この2つが呑めないようだったら他へ行ってくれ」
ボスはこれが当たり前のように言い放った。
まるで俺がここでしか生きていけないのを知ってるかのように・・・。
俺は考えた。
ココで生きていくか。
家に帰るか。
どちらにしろ親からまだ当分は離れられないことは確かだ。
でも俺はちょっとでも早く家にいたくない。
「・・・分かりました。週に1回は家に帰ります」
「そうか。よく決心したな」
ボスは遠い目でそう言った――――――――――――。

新しい家に案内してもらってまず、一息ついた。
まさかこんな事になるなんて昔では考えられなかった。
まさか親元を離れるなんて
不思議と後悔は無かった。
むしろ清々しい気分だった。

「よう！お前の家ココか？」
インターホンを鳴らさずに入ってきたのはもちろん弘樹だ。
「あぁ」
「お隣さんだな☆よろしく！」
弘樹は憎めない笑顔でそういった。
「よろしく。
お前にさぁ、聞きたいことがあるんだけど・・・」

第6章（後書き）

あと一話で過去話が終わる（予定）です。
もう少しお付き合いください＞＜

第7章

「相談て？」
弘樹が俺の顔を覗き込むようにいう。
「お前、何して稼いでるわけ？？」
「俺？俺は株☆」
「株って……お前、そんなの出来るの？？」
「俺、友達が資産家でソイツに教わったんだよ」
「資金とかは？？」
「そのダチに借りた」
弘樹は当たり前のように言う。
「で、お前は何をして稼ぐつもり？」
「……まだ決めてない」
「お前、頭いいんだから家庭教師は？？」
「でも俺、中学生だし。家庭教師って大学生ばっかじゃねぇの？？」
「大丈夫だって。お前、大人っぽく見えるから大学生ぐらいさば読んでもわかんねーよ。」
「そんなのありなのか……？」
不安そうにそういうと弘樹はしれっと
「バレなきゃ大丈夫だろ」
といった。

そして数時間の相談の後、俺は家庭教師で家賃を稼ぐことに決めた。
それから4年間、俺は無我無心でこの環境に慣れるのに必死だった。
家庭教師も今までばれていない。
今まで馬鹿みたいに背が高いことを俺は初めて感謝した。
高校はボスが一応出とけというので行っている。

幸い、風紀面ではゆるい学校なのでなんとか続けられている。
それにこの学校には弘樹や俺みたいにボスに育ててもらってるやつがたくさんいるから気が楽だった。

そして、夜遊びも覚えた。
遊んでいくと不思議と金がなくって行き、陸や弘樹がやってたような万引きにまで手を出すようになった。

もっとも弘樹は『スリルがほしいから』といって参加するだけだが……

そんな俺たちにひとつの変わった出来事が起こり始めていた…

第7章（後書き）

お久しぶりです。
なかなか出口が見つからなくていろいろがんばってました。
これで一応過去話は終わりです。
次回のことはまだ決めてませんが、とりあえず蓮の両親のことを触れたいなと。。。

どうか機会があれば見てやってください＞＜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2829d/

とおい空

2010年12月7日14時17分発行